

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：村木健路

氏名のローマ字表記：MURAKI Kenji

所属：大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

専門分野：モンゴル語学

発表のタイトル：派生接尾辞  $-tu$ ,  $-tai$ ,  $-tan$  の『元朝秘史』における性と数の呼応に関する一考察

発表要旨（600字～800字程度）：中世モンゴル語の派生接尾辞  $-tu$ ,  $-tai$ ,  $-tan$  が、『元朝秘史』においては性と数の呼応が厳密に守られていることは、小沢によって考察済みである。

それに関して、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが人間であれば、人間には性があるのだから、その性あるいは数と呼応して、男性単数  $-tu$ 、女性単数  $-tai$  複数  $-tan$  の形で現れることは容易に理解できる。『元朝秘史』では、ミスと推測される不一致がごくわずかに見られる以外は、確かに守られている。

しかし、人間ではなく動物やものと結びつく場合はどうなっているのかという疑問が残る。動物には生物上の性はあるが、そこまで意識されているのか。小沢は、この人間以外の問題にも触れてはいる。すなわち、小沢は人間以外はすべて文法的には女性扱いであって、それゆえ派生接尾辞は  $-tai$  が用いられるとせつめいしている。

ところが、必ずしもその説明に合致しない例が多く見られる。これらを整理するに際しては、人間／それ以外という二項ではなく、人間／動物／ものという三項で捉えたほうがよさそうである。

まず、動物は『元朝秘史』では文法的には男性扱いされている。つまり、動物が被限定詞もしくは主語の位置にあるときの派生接尾辞は  $-tu$  になっているのである。ただし、数は意識されていて複数の動物であれば  $-tan$  で現れる。

次に、ものはその文の主体と呼応しているのではないかと考えられる。つまり、ものとのとを結びつける派生接尾辞が何になるかのかは、その箇所だけでは決まらないのであって、たとえばその所有者や、それを扱っている人間の性または数と呼応していると推測される。

本発表は、従来の小沢の研究を再検討し、問題点を指摘するとともに、新たな視点から真実を明らかにすることをめざすものである。